

近世における文字文化の地域的浸透

十八世紀前半における越後の俳諧文化と関連して

八楸友広

The Regional Spread of Literary Culture in Early Modern Japan: Connecting with the Culture of Haikai in Eighteenth Century in Echigo Province

- ① 近世社会と文字文化
- ② 越後・佐渡の近世俳諧
- ③ 佐久間家と「俳諧留」
- ④ 「俳諧留」にみられる十八世紀前半の俳諧文化
まとめ

【論文要旨】

本稿は、十八世紀における越後地域の俳諧文化の実態を検討することによって、文字文化の地域的な浸透の一面を明らかにしようとするものである。

越後蒲原郡佐久間家の「俳諧留」は、正徳期から寛保期における多数の俳額および歳旦帳を記録したものである。これまでの俳諧史研究においても十分には解明されていない、十八世紀前半の俳諧文化の地域的な実態を知り得る、きわめて貴重な資料といえる。

「俳諧留」の分析によって、各地の社寺への俳諧の奉納が、十八世紀前半の時期からきわめて活発におこなわれていることが明らかとなる。二千句をこえる俳句が投じられた奉納もあり、すでにこの時期に、濃密な俳諧文化の浸透があったことが確認される。

越後佐渡における俳人については、各地の句集に掲載される俳人をまとめた「越佐俳人名索引」〔近世越佐の俳書 第一巻〕一九九八〕があるが、「俳諧留」には、これ

に掲載されない俳人が多数登場する。句集などには登場してこない多数の俳人が、地域の中に存在したことがわかる。その中には、「盲人」、「遊女」、「少人」などの肩書きを有するものもあり、女性も十五人ほどがみえる。

入集した俳人の地域の分析から、俳諧奉納のネットワークには、三段階ほどのパターンが存在したことが見いだされる。奉納先社寺近隣の地域の俳人が中心となったもの、下地域一帯から寄せられたもの、全国から出句されているものなどである。

俳額の奉納は、奉納地近隣地域の俳人たちによって開催されるものであったが、俳人によっては、奉納のたびに入集している者もあった。もちろん、投句しても必ず選句されるとは限らないから、俳人たちは、奉納の機会をとらえて活発に投句した。こうして俳額奉納は、創作された俳諧を発信するメディアとしても、重要な役割を果たしていたのである。

① 近世社会と文字文化

近世社会は識字力が著しく普及した社会であった。もちろん、識字能力の社会的蓄積は古代以来なされてきたものであり、近世期における識字力の基礎は、すでに十三世紀後半以降に用意されていたとする指摘もある。⁽²⁾ また、近世期における識字の分布は地域的にもきわめて多様性に富むものであり、著しい格差が存在したことも確かである。⁽³⁾

しかしそれにもかかわらず、近世期は識字能力とそれを基礎としたさまざまな文字文化が花開いた時代であったといわなければならない。このことは、近世期に発行されたおびただしい出版物や、それら売りさばくための多数の書肆が存在したこと、読み書きの教育の場である手習塾の著しい成長、数千種類にも及ぶ往来物の普及などの事実から明らかである。

このような識字の普及は、基本的には中世末から増大し、近世期に全国市場を形成するようになる流通の展開と無関係ではなかったと考えられる。近世往来物には、地名、物の名辞などをただ列挙しただけのものが少なくないが、これは、近世往来物の眼目が、増大しつつあった商品と、その流通がもたらす地理認識の需要に応えるものであったことを示している。その意味で識字の普及は、生活上における記号操作の必要性を基本的な要因として展開したのだといえる。

しかし、文字使用の普及は単なる記号操作能力の普及にとどまるわけではない。当然のことながら、文字が創り出す多様な文化的な世界と連続しているのである。識字が普及してそれが大衆化するということは、文字が形成するこのような文化世界への接触が大衆化するということがもあつた。

俳諧は、種々の文字文化のなかでも、もっとも大衆化したもののひとつである。

大衆化のあまり、俳諧そのものが通俗化、低俗化したということがしばしば指摘されるが、歴史的にみれば、文字文化の地域的な浸透という点で、俳諧文化は重要な位置を占めている。

単に文化を受容するだけでなく、自らが文学的な創作に関わり、時として（句集や奉納額などの形で）それを発信する主体ともなるという点で、俳諧はきわめて能動的な文化営為といえることができる。このようなことが可能であるのは、俳諧がきわめてシンプルな形式をもった文学表現であるからにはかならないが、文学としての奥行きそのものは、間口の広さとは無関係である。今日も文学表現の一形式としてその地位を失っていないように、俳諧は、高い普遍性を有する文化的な世界を実現してきたといえる。

多くの人々が俳諧に参加していったとき、たとえ月並みで通俗的な俳句しか詠めなかったとしても、そこには、彼方に存在している文学的な世界への憧憬が込められていたはずである。今も各地の社寺には、かつて奉納された俳額が無数に残っているが、それは、俳諧に向けられた人々のエネルギーがいかに膨大なものであったかを示している。俳諧が創り出す文学世界への人々の強い憧憬を、そこに見いだすことができるのである。

識字の普及は、こうして多くの人々を文字文化の世界とも接触させることとなった。しかし識字力の社会的形成が、商品生産や流通などと深い関係をもつてなされる以上、文字文化の世界との接触も、そのようないわば生業の世界のありようと無関係ではあり得ない。青木美智男は、いわゆる化政文化について、近世社会の構造的変容（農民的商品生産の発展とそれによる都市・農村の変容）に根ざした新たな文化の形成ととらえているが、このような視点は、文化の形成を生業の世界の変容とかわらせてとらえようとするものである。

杉仁の「在村文化論」も、このような視点に貫かれたものである。杉

は近世農村における文化を「在村文化」と呼び、俳諧、書画、生花、茶道、狂歌、和歌、漢詩などの諸文化が、在村においても広く展開していたことを明らかにした⁵⁾。在村文化の特徴は、技術・生産・流通などの生産文化と区別なく一体化している点にあった。在村文人たちは、都市の専門文人とは異なり、風雅の世界と生業の世界とを同時に担っており、こうした在村文人らの活動により、農山漁村一帯に海のように面状に広がる文化現象が在村文化であったのである。

在村文化のなかでも俳諧は中心的な位置を占めていたが、杉によれば俳諧の文化圏や分布路は、それぞれの地域の商品流通路と密接な関係を持っていた。すなわち生産技術や商品の流通と風雅の交流とは、一体のものであったというのである。

このように、生業の世界と深い関係を持ちながら地域のなかに深く浸透していった俳諧文化の実態が解明されつつある。しかしこれまでの研究の対象が、化政期以後に限られることが多かったことも事実である。小林計一郎は「神社に奉納される句額は、天保以降明治ころのものもつとも多く、俳諧がもつとも庶民に浸透したのはこのころと思われる」と述べているが、杉の研究でも、取り上げられる俳額は近世後期のものがほとんどである。確かに、現存している俳諧などは近世後期から明治期にかけてのものが多い。しかしこれを単純に俳諧の普及過程を示すものとみるわけにはいかない。歴史の古いものほど保存されにくいであろうし、奉納が繰り返される結果、古い俳額が取り外される場合もあったと考えられるからである。

現存する俳額を見るかぎり、俳諧の地域的な浸透は近世後期以後のことのように思われる。しかし実態はどうだったのだろうか。俳諧が全国的に盛んになり始める十七世紀後期以後、どのような過程を経て、十九世紀以後の俳諧大衆化の時代を迎えるのか、このことについては未解明の部分が多いのである。刊行された句集や、現存する奉納額などだけで

なく、日常的におこなわれた句会や歳旦などの資料を丹念に収集することが必要であろう。

佐久間家（新潟県北蒲原郡笹神村）が所蔵する「俳諧留」は、この点で貴重な資料である。「俳諧留」は享保期～寛保期にかけての奉納俳諧や歳旦などを記録したものであり、この資料によって、十八世紀前半における地域的な俳諧の実態を知ることができるからである。本稿では、この佐久間家「俳諧留」を主な素材として、越後蒲原郡を中心とした地域の俳諧について考察してみたいと思う。

② 越後・佐渡の近世俳諧

佐久間家の「俳諧留」を分析するにあたって、まず越佐（越後・佐渡）地域の俳諧文化の概要についておくこととしよう。

越佐では、佐渡に流されてきた文人らを中心とした文化的な活動が初期から盛んであったが、長い海岸線を通じた上方との交流も活発であった。松永貞徳・西山宗因を祖とする貞門・談林は、いずれも京都・大坂から広まったが、越佐では、まず海岸地域の町にこれらの俳諧の影響が及んだ⁷⁾。

元禄年間までの貞門・談林の俳書に入集している越佐の俳人は、新潟四〇人を筆頭に、柏崎二一人、高田十五人、村上八人などであり、ほとんどが、海岸地域の町の人である。この時期には、少なくとも両派の俳集には、長岡や新発田などの内陸部の町の俳人が登場してこないことが特徴となっている⁸⁾。

越後最古の俳人の句を収める俳書は、京都の表紙屋庄兵衛が刊行した「歳旦発句集」であり、寛永十六（一六三九）年以前の「年次不明」として掲載されているものであるという。これにつづいて、寛永十九（一六四二）年の「鷹筑波」に、新潟の俳人が確認される⁹⁾。このように、近世

初期においてすでに、畿内の俳諧文化の影響がみられ、海岸線を中心とした地域に広く及んでいた。

諸国の俳書に入集されるだけでなく、越佐の俳人が中心となった俳書も編纂されるようになる。現在までに確認されているものでもっとも古いものは、元禄五(一六九二)年の「連句集 柏崎連中」であり、つづいて元禄十六(一七〇三)年の「誹諧柏崎」、翌元禄十七(一七〇四)年の「藁人形」、宝永五(二七〇八)年の「夏ころも」、同年の「越の名残」などである¹⁰⁾。十七世紀末頃から、独自の俳書の出版が開始されるようになったことがわかる。近世期に出版された越佐の俳書は、確認されるもので二百部以上にのぼるといわれるが、そのほとんどは京都で出版されている。このことにも、越佐の俳諧が日本海海運を通じて上方と深いつながりを有していることがあらわれている¹¹⁾。

『近世越佐の俳書 第一巻』は、寛延二(一七四九)年までに出版された越佐の俳書を網羅したものであり、その末尾に「越佐人名索引」という俳人一覧を掲載している。これによれば、新発田二二一名、長岡三二名、水原一九名、新津一九名、栃尾一四名など、内陸部の地域にも多くの俳人が現れはじめている。また、町部だけでなく、村々にも多数の俳人が登場しており、十八世紀を過ぎると越佐の俳諧文化は、杉仁がいう「面状」の広がりを見せ始めていたことがわかる。

近世の俳諧は、貞門・談林・蕉風の順で隆盛をみたといわれるが、越佐においても、およそこれに照応している。しかし越佐の場合、蕉風以後はとくに美濃派の影響がきわめて濃厚であった。これは、美濃派を起こした各務支考と、その弟子であった蘆元坊がたびたび越後を訪れ、その俳風を伝えたためである¹²⁾。支考は宝永三(一七〇六)年と同五年の二回にわたり来越しており、蘆元坊は享保十二(一七二七)年、同二〇年、寛保二(一七四二)年と、三度来越している。この間、多数の門人を成した。なかでも新発田の杵虹は、蘆元坊の忠実な支持者であり、美濃派を

広めるために、秋田から九州に至るまで各地を行脚したほどである¹⁴⁾。

杵虹の没後、天明六(一七八六)年、門人であった緑扇は杵虹十三回忌集として『暁の空』を編んでいる。これには杵虹門下の五七〇人が総出句しているが、杵虹の地元である新発田から八二人のほか、長岡四五人、村上三八人、鱒田(三条市)二九人、葛籠山村(神林村)二〇人、五泉一九人、新潟一六人など、越後各地から出句されており、杵虹の広範囲にわたる地域的なネットワークがあったことがわかる¹⁵⁾。しかしながら、『新潟県史』も指摘するごとく、これらの出句者の居住地は下越地域に偏っており、上越や魚沼地域からはほとんどみられない¹⁶⁾。蘆元坊の高弟として重きをなした杵虹においても、地方的な宗匠としてのネットワークは、一定の地理的な範囲に限定されるものであったのである。

ところで、このような地域的な俳諧文化圏は、どのようにして形成されたのだろうか。俳諧のネットワークは、まずは地域内の結社として結ばれる。やや後世の事例であるが、新津の俳諧結社として、「古津雪山楼連中」(寛政十年)、「新津大柱庵連中」(寛政十三年)、「福嶋連中」(文化七年)など、現在の新津市域で十ほどの結社が確認されている¹⁷⁾。また現在の十日町市域では、幕末期には各集落単位ごとに結社があったことが知られている¹⁸⁾。後述する佐久間家「俳諧留」にも、「新潟連中」「沼垂連中」「白根連中」「白井連中」などがみえ、すでに十八世紀前半の時期に、各地に結社が存在したことがわかる。

俳諧結社は、日常的に句会や歳旦、寺社への奉納などの活動をおこなっていた。歳旦は歳旦開ともいわれ、元日に句会をおこなうことであり、歳末・歳旦(元旦)の句を集めて歳旦帳として印刷し配布した。寺社への奉納は、地域内の結社だけでなく、内外に投句を呼びかけ、撰者がこの中から選んだ。俳人にとっては、自分の句が評価され、また世に出る機会でもあった。これらの日常的な俳諧活動を知り得る資料は、必ずしも多くないが、越佐地域に残る歳旦帳のうちもっとも古いもののひとつ

は享保二二(一七三六)年の「越後長岡歳旦」である¹⁹。奉納額では、元禄十一(一六九八)年の『新潟寺社古来記』に記されている白山社奉納の「俳諧之絵馬」と、神明社奉納の「俳諧之絵馬」がもっとも古いものと思われる²⁰。これらは絵馬ではあるが、俳諧および歌仙を記したものであり、社寺への奉納俳諧の初期の例といえる。現存する俳額のなかで古いものは、堀之内町明神の熊野神社に残る宝曆七(一七五七)年の額²¹、宝曆九(一七五九)年と記される吉川町素盞鳴神社の奉納絵馬²²、十日町市四日町の観音堂に奉納された明和元(一七六四)年の俳額などである²³。とくに四日町観音堂の額には三五七二句もの俳句が寄せられており、当時の俳諧の隆盛を知ることができる。また、堀之内町熊野神社と十日町観音堂の額では、笠付けや前句付けなどの雑俳の形式がみられる²⁴。雑俳のみられる奉納額は新潟県内では少ないといわれるが、このふたつの俳額がいずれも十八世紀のものであることは注目される²⁵ところである。

さて、奉納俳額は十九世紀以後のものになると頻繁に確認できるようになる。十日町市域では、文化六(一八〇九)年から慶応四(一八六八)年までの俳額六〇枚が発見されており、町部だけでなく周辺の村部まで及んでいる。三島町では、江戸期の俳額が七枚発見されているが、最古は氣比神社に奉納される文化二(一八〇五)年のものである²⁶。他の市町村においても、発見されている俳額の多くは近世後期のものである。

俳諧に参加した人々の階層も、時期によって大きく異なつたと考えられる。享保期前後の新潟町の俳人で、その身分がわかる者としては、回船問屋や町老、医師、僧侶などがあり、沼垂町(新潟市)でも質屋・酒造業などを営む町役人などが知られている²⁷。このほか、宝暦年間に活躍した新津組大庄屋の杜明(古田九右衛門)²⁸、同じく宝暦期における見附地域の金井家・小林家の両大庄屋、村松藩御用達の渋谷家などが知られる²⁹。このように俳諧文化の前期には、富商や豪農、村役人、大庄屋など、町村の上層部がおもな担い手であったと考えられる。

また、藩士が宗匠として地域の俳諧の指導的な存在となる場合もあった。村松町の初代宗匠といわれる器白は、姓を高橋、通称岸右衛門とい、村松藩の物頭役二五〇石取りの藩士であった。寛保三(一七四三)年の序文を有する俳書を編んでいる。器白以後、九代まで宗匠格をひきつぐが、八代、九代が不明のほかは、いずれも村松藩士である³⁰。

幕末期になると、俳諧は著しく大衆化する。十日町市域では、集落ごとに俳諧結社が存在したことは先に述べたが、集落によっては、全戸に俳号をもつた俳人が存在したといわれる³¹。このような例は必ずしも一般的なものとは言い難いだろうが、俳諧がきわめて大衆的なものとなつていたことがわかる事例である。

以上のように、越佐においては海岸線地域を中心として、いち早く俳諧文化が興隆したが、十八世紀中頃までには、深く内陸部にも浸透し、各地に俳額がかけられるようになる。幕末期には、十日町地域のように、著しい大衆化をみせるのである。

③ 佐久間家と「俳諧留」

「俳諧留」を所蔵する佐久間家には、「諸事覚書」ともいうべき大部の冊子がある³²。宝永・享保年間の記録であり、支配の変遷、各村の村高などのような公事に関するものから、「佐久間家系」、自家の持ち高など家内に関する記録、「源平盛衰記」の書き抜きなど、種々の記事を所載している。表紙はなく表題もないが、ひとまずこれを「諸事覚書」と呼んでおこう。

正徳元(一七一)年の年号を有する「佐久間家系」には、寛文十一(一六七)年生まれの名左衛門の名前が見える。この家系図が作成された正徳元年には四十歳にあたる。宝永七(一七一〇)年には名左衛門の娘を妻として孫左衛門が入籍しており、佐久間家を継承している。孫

左衛門は元禄三(一六九〇)年生まれであり、ちょうど二〇歳の時のことであった。「諸事覚書」の記事も宝永七年から始められており、覚書の作成は孫左衛門の入籍と関係しているかもしれない。おそらく家の継承を念頭に置いて、名左衛門が作成したものであろう。

宝永七年の「須走村高免附」によれば、須走村の高はおよそ三八四石であり、このうち名左衛門の持ち高として一〇〇石四斗五升四合の記載が見える。村高全体の四分の一にあたり、村内随一の大高持ちであったことがわかる。庄屋はおよそ八〇石を有する井上市郎左衛門が務めているが、佐久間家とは縁戚関係にあった。これらのことから、佐久間家の俳諧文化への参加の背景に、巨大な経済力があつたことが確認される。

次節で検討する「俳諧留」は元文(寛保期(一七三六―一七四三))にかけての俳諧記録であり、名左衛門もしくは孫左衛門のいずれかが作成したものと思われる。佐久間家には「俳諧留」のほか、種々の俳諧資料がある。年号のわかるものとしては元文二(一七三七)年の「月並寄撰句留」、元文三(一七三八)年の「中嶋村薬師堂奉納前句」、宝暦五(一七五五)年の江府浅草御堂前辻村五兵衛の版になる俳諧手引き書などがある。この時期に活発に俳諧情報を収集し、俳諧活動をおこなっていることがわかる。「俳諧留」の作成も、このような俳諧活動の一環であったのである。

④「俳諧留」にみられる十八世紀前半の俳諧文化

1 「俳諧留」とその作者

「俳諧留」は、紙数一〇七枚に及ぶ大部の横帳である。表紙には「俳諧留」と記してある。その内容は、各地の社寺に奉納した句集、歳旦帳などが中心であるが、そのほかに、「俳諧其鑑之内」「諸国文通発句」「剃髪

の賀」などと題する句集や、「懐旧午ノ臘月五日興行」という句会の句集、あるいは「勢多長橋巻一」と題する俳諧の書籍の書き抜きなど、俳諧に関する種々の資料を採集したものである。歳旦帳や奉納句集は年代順に収録されているわけではなく、また地域的にも規則性はみられない。おそらく、記事を入手するたびに、作成者がこれを書き留めたものであろう。

「俳諧留」の作成者は、前述したように、佐久間名左衛門もしくは孫左衛門と思われるが、収録されている句集にもたびたび登場する須走村兔睡という俳号を名乗る人物であつたと推定される。佐久間家が所在する須走村の俳人としては、この兔睡のみが見え、また兔睡は、元文元年木津村薬師、元文三年中嶋村薬師堂、元文五年宮内八幡宮、寛保元年六勺ノ原弁天堂の各奉納俳額に入集している。木津村薬師と中嶋村薬師堂ではそれぞれ二句が収められており、中嶋村薬師堂の奉納は、兔睡自身が願主ともなっている。したがって、この時期にかなり活発に俳諧活動をおこなった人であることが知られ、自らが投句した奉納俳諧について書き留めたのが、この「俳諧留」であつたと考えられるのである。

収録されている句集には、自身が出句した俳額だけではなく、実際にあるいは文書などを通じて見聞したと思われる他の俳額に関するものもある。たとえば正徳六(一七一六)年の白山宮奉納と、享保三(一七一八)年の新瀧如来寺大仏堂の句集の後に、「右二巻八寛保元年の小春写之」と記している。これらは、兔睡が奉納俳額に出句するようになる二〇年ほど以前のものであり、これを写した寛保元年頃に見聞したものであろう。また出湯村薬師奉納についても、「享保の頃か」と記している。出湯村(北蒲原郡笹神村)は須走村の近隣地域であり、実際に見聞した俳額について、享保初期の頃のものとして推定したのであろう。

このように「俳諧留」は、元文期に俳諧活動をおこなった兔睡と号する人物が、自らの活動の対象となつた奉納俳額や、入手した俳額・歳旦

表1 佐久間家「俳諧留」

	名 称	場 所	現自治体名	年 代	種 類	撰者等	掲載数	寄句数	備 考
1	新潟白山宮奉納	新潟町	新潟市	正徳6(1716)	奉納	慈竹	20		百番之内
2	新潟如来寺大仏堂	新潟町	新潟市	享保3(1718)	奉納	慈竹	7		廿番之内
3	寺社村観音堂奉納	寺社村	水原町	享保4(1719)	奉納	一雨	25	400	
4	出湯村薬師奉納	出湯村	笹神村	享保初の頃	奉納	慈竹	10		
	歳旦	新潟町	新潟市	享保11(1726)	歳旦		83		新潟蕉門連中
	元旦	新潟町	新潟市	享保12(1727)	歳旦		66		新潟蕉門連中
	歳筵	新潟	新潟市	享保16(1731)	歳旦	東伯集記	103		新潟蕉門連中
5	木津村薬師奉納	木津村	横越町	元文元(1736)	奉納	池柳	72		
6	寺社村観音堂奉納発句寄	寺社村	水原町	元文2(1737)	奉納	池柳	33	500	
7	中之嶋町諏訪宮奉納	中之嶋町	中之嶋町	元文2(1737)	奉納	勢州乙由	100	1530	
8	下条村天満宮奉納発句寄	下条村	水原町	元文3(1738)	奉納	白坊	36	560	
9	小杉村八幡奉納	小杉村	横越町	元文3(1738)	奉納	池柳	72	1000	
10	中島村薬師堂奉納	中島村	水原町か	元文3(1738)	奉納	池柳	50	615	
11	岩船宮奉納	岩船町	村上市	元文3(1738)	奉納	止角評	72		
12	同奉納発句	岩船町	村上市	元文3(1738)	奉納	止角評	72		
13	新潟法音寺観音奉納	新潟町	新潟市	元文3(1738)	奉納	池柳評	33		
	未ノ歳旦	新潟町	新潟市	元文4(1739)	歳旦	勢州乙由	110		新潟連中
	元文四未歳	新発田	新発田市	元文4(1739)	歳旦		30		越後新発田連中
14	国上山如来殿奉納	国上村	分水町	元文4(1739)	奉納	一字	50	1300	
15	保田町地藏堂奉納	保田町	安田町	元文4(1739)	奉納	池柳	44	583	
16	菅谷不動堂奉納	菅谷村	新発田市	元文4(1739)	奉納	池柳	100	2310	
	己未歳旦	不明	不明	元文4(1739)	歳旦		14		
17	外城村八幡宮奉納	外城村	水原町	元文5(1740)	奉納	池柳	50	600	
18	宮内八幡奉納	不明	不明	元文5(1740)	奉納	池柳	70	1000	
	元文五申歳序	新潟町	新潟市	元文5(1740)	歳旦		42		
19	六勺ノ原弁天堂奉納	不明	不明	寛保元(1741)	奉納	池柳	36	400	
	寛保元酉歳旦	不明	不明	寛保元(1741)	歳旦		22		抜書
20	木津村薬師奉納発句寄	木津村	横越町	寛保元(1741)	奉納	池柳	36		
21	新潟如来寺奉納	新潟町	新潟市	不明	奉納	止角	72	1300	
22	三条町観音堂奉納	三条町	三条市	不明	奉納		7		
23	新潟白山奉納	新潟町	新潟市	不明	奉納	止角	13		
24	天野神明宮奉納	新潟町	新潟市	不明	奉納	慈竹	36		
25	笠巻奉納	西笠巻村	白根市	不明	奉納	東伯	50	1100	

佐久間家「俳諧留」に掲載されるもののうち奉納俳額、歳旦帳を年代順に並べた。

奉納俳額には左欄に整理番号を付した。

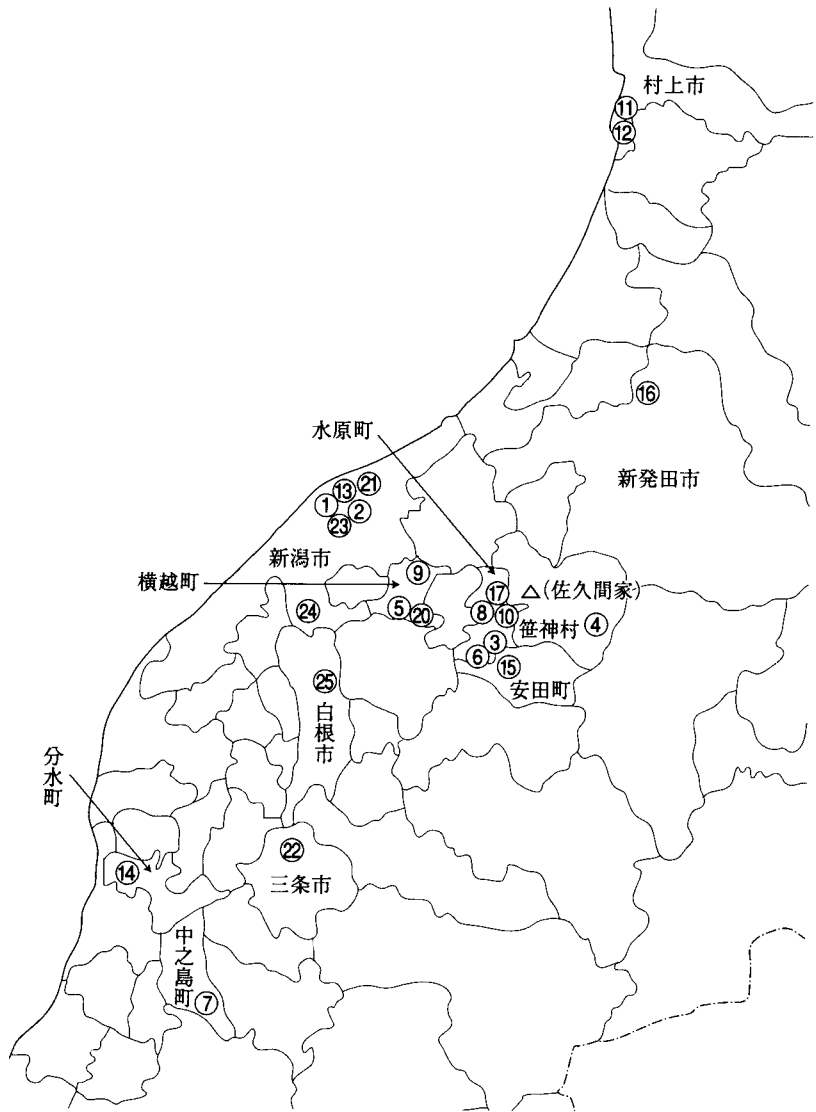


図1 「俳諧留」奉納俳諧一覧 数字は表1の整理番号

もっとも初期の奉納俳額といってよい。前節でみたように、白山宮には元禄十一(一六九八)年頃に絵馬が奉納されたことが知られているが、正徳六年のこの奉納は俳額の奉納として注目される事例である。元文三年には六回、翌元文四年には三回にわたって奉納が行われており、元文期に、きわめて頻繁に俳額奉納がおこなわれていたことがわかる。現存する俳額は近世後期・幕末期のものがほとんどであり、十八世紀後半が限界線となっている。それ以前において俳額の奉納がどの程度おこなわれていたかは不明であったが、「俳諧留」によって、十八世紀初頭から前半にかけての時期において、すでに俳額奉納が隆盛をみていたことが判明するのである。

それぞれの奉納に寄せられた俳句数も膨大なものである。元文四年菅谷不動堂の二三一〇句をはじめ、元文二年中之嶋町諏訪宮の一五三〇句など、千句を越す奉納が日常的におこなわれていたことがわかる。もちろん一人で何句も出句する場合もあっただろうが、それにしても膨大な数である。ひとつの奉納俳額に、数百名の俳人が句を寄せていたこととなる。十日町市に残る四日町観音堂の俳額は明和元(一七六四)年に奉納されたものであるが、前述の通りこれには三五七二句の俳句が寄せられている。十八世紀後半のこのような隆盛は、すでに十八世紀前半の時期に準備されていたといえよう。

次に、句会や奉納が開催された場所に注目してみよう。まず歳旦についてみると、新潟町がほとんどである。一件だけ新発田町のものがあるが、不明の二件をのぞく四件が新潟町でおこなわれたものである。十八世紀前半の時期に、新潟町で盛んに歳旦の句会が開かれていたことがわかる。歳旦帳は印刷して俳諧仲間配布したといわれるが、兎睡も、なんらかの伝手を得てこれらの歳旦帳を入手したのであろう。

などについて書き留めた俳諧記録であった。

2 十八世紀前半における下越地域の俳諧

「俳諧留」に収録される資料のうち、奉納句集と歳旦帳を年代順に一覧にしたものが表1である。二五の奉納俳額と、八つの歳旦帳を収めている。記事は正徳六(一七二六)年から、寛保元(一七四一)年にわたっている。

正徳六(一七二六)年の新潟白山宮の奉納は、越佐地域のなかでも、

表2 「俳諧留」俳人一覧

地名	A	B	地名	A	B	地名	A	B
<村上市>			酒屋	6	2	戸頭	1	0
岩船	28	2	新通	2	0	西笠巻	1	0
<中条町>			曾川	2	0	東萱場	1	0
柴橋	1	0	鍋湯	1	0	松橋	2	1
十二天嶋	1	0	新潟	79	41	鷺之木	1	0
<加治川村>			沼垂	6	4	<五泉市>		
奥村新田	1	0	平賀	1	0	五泉	5	2
加治	15	5	舞湯	1	0	下新	1	0
相馬新田	1	0	割野	9	2	下条	3	0
藤井新田	1	0	<黒埼町>			<村松町>		
<紫雲寺町>			大野	3	0	村松	22	1
宮吉新田	1	0	木場	3	1	<加茂市>		
<新発田市>			黒島	2	0	加茂	2	1
新発田	20	11	立仏	1	1	<燕市>		
則清	1	0	鳥原	4	2	小池	2	0
<豊栄市>			<味方村>			<三条市>		
太子堂	1	0	味方村	1	1	井栗	3	1
長戸呂	1	0	<月潟村>			一木戸	1	0
<豊浦町>			上曲り	1	0	三条	9	1
荒町	9	0	木滑	1	0	下保内	1	0
池端	1	0	<西川町>			保内	4	0
中ノ目	1	0	押付	2	1	<津川町>		
<笹神村>			曾根	1	1	津川	2	0
大室	4	0	東曾根	1	0	<栄町>		
女堂村	1	0	<巻町>			大面町	1	0
笹岡	5	0	竹ノ町	1	0	尾崎	1	0
須走	2	0	巻町	5	3	<中之島町>		
出湯	1	0	三根山	1	0	中之嶋	10	1
山崎	2	0	<岩室村>			<見附市>		
<水原町>			和納	1	0	今町	14	0
五分一	1	0	<吉田町>			<栃尾市>		
里	2	1	吉田	4	2	栃尾	3	1
庄ヶ宮	1	0	<弥彦村>			<長岡市>		
水原	24	8	弥彦	1	0	関原	2	0
寺社	6	1	<分水町>			長岡	7	4
堀越	5	1	分水町	1	1	<寺泊町>		
<安田町>			<新津市>			寺泊	1	0
保田	7	4	川口	2	2	<和島村>		
<亀田町>			北上	3	0	小嶋谷	2	0
亀田	10	7	塩谷	1	0	<柏崎市>		
<横越町>			新津	8	1	柏崎	1	1
木津	7	3	荻島	1	1	<上越市>		
小杉	2	1	福嶋	1	1	高田	2	0
沢海	2	0	結	2	1	直江津	1	1
横越	12	6	<白根市>			<糸魚川市>		
<新潟市>			笠巻	6	1	糸魚川	1	1
大湊	1	0	白井	5	3	<不明>	177	0
か木	1	0	上八枚	1	0			
加瀬	5	2	白根	11	5			
北山	1	0	高井	1	0	合計	652	145

佐久間家「俳諧留」により作成した。

A欄は「俳諧留」にみえる俳人数。B欄はこのうち『近世越佐の俳書第1巻』『越佐人名索引』にみえる俳人数である。

黒埼町は現在新潟市となっている。

俳額を奉納された社寺のうち所在地のわかるものを示したのが図1である。佐久間家のある須走村は、現在の笹神村の西端、水原町との境界近くである。図1からわかるように、水原町、横越町、安田町、笹神村など、佐久間家の近隣地域のものが多い。このうち、兎睡の句が入集したのは、⑤と⑩である。出句しても必ず入撰するとは限らないから、兎睡の句が見あたらない他の俳額にも、実際には投句していたのではないかと思われる。

表2は、「俳諧留」の歳旦・奉納俳額に俳号の見える俳人数の一覧である。表のA欄が「俳諧留」に掲載される俳人数であるが、このうち『近世越佐の俳書 第一巻』『越佐人名索引』のなかに確認し得る者の数が多いが、南は中之嶋町(中之島町)、北は岩船町(村上市)にまで及んでいる。いずれも須走村からは五〇キロ程の距離にある。これは兎睡が関心を示しあるいは参加する俳諧ネットワークの範囲とみてよいだろうが、およそ現在の下越地域の範囲内であったといえる。兎睡は奉納の願主となつてはいるが、句集の撰者とはなつておらず、宗匠などの立場にはなかつたと思われる。このような在村的な俳人においても、下越地域に広がるネットワークを有していたのである。

をB欄に示した。すでに述べたように、「越佐俳人名索引」は寛延二(一七四九)年までに越佐で編纂された俳書に登場する俳人の索引である。したがってこれは、俳書に句を載せるような、ある程度力量を認められた俳人の名簿といえる。「俳諧留」に見える俳人は、六五二人にのぼるが、このうち「越佐俳人名索引」に確認し得る者は一四五人にすぎない。残りの五〇七人は俳書などには登場してこないような句作者たちであつ

た。
新潟町の七九人が最も多く、岩船の二八人、水原の二四人、村松の二人、新発田二〇人などがつづいている。これらを現在の市町村単位に示したのが図2である。図からわかるように、俳人は下越地域、とくに新潟市、水原町、白根市、横越町、村松町、新発田市、新津市などの中蒲原郡と北蒲原郡の南部に集中している。中越および上越地域の俳人は、



図2 「俳諧留」所収俳人分布 数字は俳人数

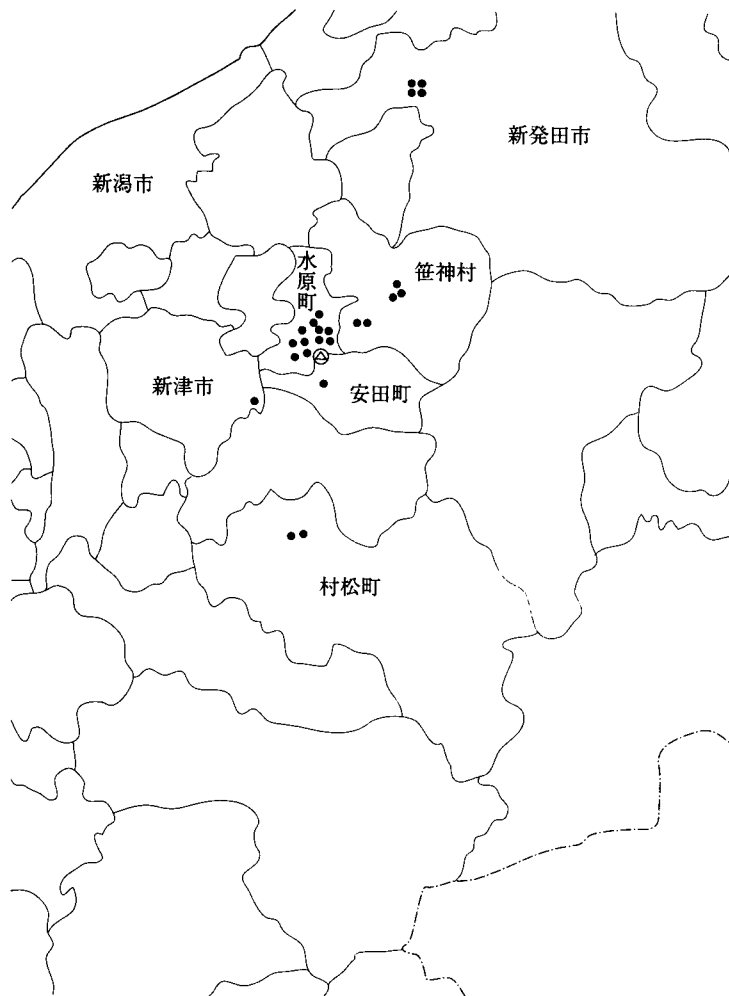


図3 享保4年寺社観音堂奉納
 ⊙奉納先 ●入撰者

ほとんど見あたらない。もちろんこれらの地域に俳人が存在しなかったのではなく、地域で開かれる歳旦や奉納の地理的な範囲を示しているにすぎない。

それぞれの俳額に入集している俳人の分布をみてみると、日常的な俳諧の範囲がさらによくわかる。俳額によって寄せられた句数は異なるが入集している俳人の分布も、比較的近隣の地域に限られる場合と、下越地域一帯に及ぶ場合とがある。図3は、享保四年に寺社村観音堂に奉納された俳額の例である。願主は堀越村（水原町）の和水であり、五泉町（五泉市）の一雨が撰者となっている。四百余の俳句が投じられているが、そのうち二五句が撰ばれている。寺社は現在の水原町にあり、入

集している俳人も、水原町、笹神村などの人が多い。堀越から五人が入集しているが、願主が堀越村の人であったことも関係しているかもしれない。新発田町からも四人の入集者があるが、寺社村からおよそ二〇キロほどの場所にある。この奉納では、奉納社寺の近隣地域から句を募っているとみてよいだろう。

図4は、元文三年の小杉村八幡奉納である。およそ千句のうちから七二句を掲載している。奉納先は現在の横越町の北部、小杉村である。横越町、新潟市南部、新津市北部など、奉納先の近隣地域の密度が最も高いが、南は見附市、長岡市、北は村上市まで入集者があり、下越地域全域に及んでいる。撰者は新潟の池柳であるが、この時期の越後における代表的な宗匠とみられ、他の奉納においても頻りに撰者をつとめている。

図5は、元文二年の中之嶋町諏訪宮奉納である。一五三〇余の句が寄せられている。撰者は勢州の乙由に依頼している。乙由は伊勢の人で、芭蕉の門人、各地を行動して平俗な俳風を広めたといわれる。伊勢派と呼ばれる強大な勢力を築き、各務支考の美濃派と並んで、「鄙曲」の蕉風に属する⁽³³⁾。なお、元文四（一七三九）年にも新潟連中が乙由にあてて歳旦を送った手紙が記されており、乙由と越後俳諧の関係を物語っている。さすがにこのクラスの撰者の場合には、広く句が寄せられたようである。北は村上市、南は長岡市、小千谷市などの古志郡、魚沼郡にまで及んでいる。しかし入集者が奉納社寺の地元である中之嶋町と、その隣接地域である今町（見附市）に集中していることも、この奉納の特徴である。全国的に著名な俳人を撰者にして、広く越後内から句を募りつつも、地元地域の結社が基盤となっていたことがわかる。

元文三（一七三八）年に岩船宮に奉納された俳額には、羽州（現在の山形県）からも句が寄せられている。庄内カモから二人、大山から二人、鶴岡から四人の俳号がみえる。いずれも山形県庄内の地域であり、岩船とは海路を通じてつながりが深い。米沢一名もみえるが、米沢街道を通

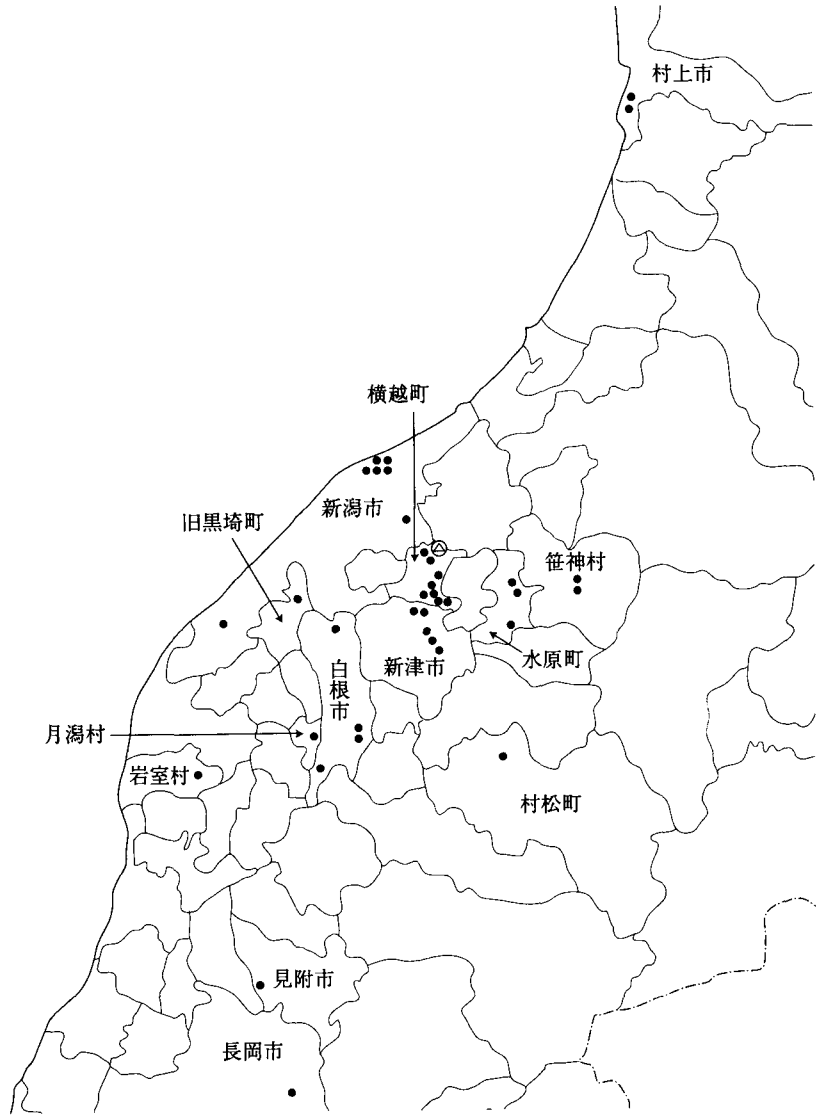


図4 元文3年小杉村八幡奉納
 ◎奉納先 ●入撰者

じた、羽州米沢城下とのつながりであろう。また越後内においても、南部の港町である柏崎の人が一名あり、概していえば、この岩船宮の奉納には広い範囲から句が寄せられているといえる。

正徳六（一七二六）年の新潟白山宮奉納には、越後だけでなく、広く諸国から句が寄せられている。与板、三条、新潟、加治、弥彦などの越後の地名のほかに、出羽、奥州、若松、能登、越前、江州、大坂、京などの国名が見える。「外略ス、百番之内」という書き込みがあるので、実際には百句あったものの中から抜き書きしたものであることがわか

る。「俳諧留」に書き留められた範囲でも、様々な地域から出句されており、この奉納がきわめて大規模なものであったことが推測される。撰者は、他の奉納にもしばしば撰者としてあらわれる新潟の慈竹がおこなっている。新潟町の俳人たちが中心となって、全国に投句を呼びかけたのであろう。

以上のように、「俳諧留」に記される奉納俳額の地理的な範囲をみると、およそ三種類ほどにわけることができるようである。享保四年の寺社村観音堂のように、奉納社寺の近隣地域に限られるもの、元文三年小杉村八幡、元文二年中之嶋町諏訪宮などのように、近隣地域を中心としながら、下越一帯に及んでいるもの、正徳六年新潟白山宮の場合のように、全国から出句されるものなどである。新潟白山宮のような事例は、十八世紀初頭の段階で、全国に投句をよびかけて俳額を奉納するといったことが越後においてすでにおこなわれていたことを示すものであるが、必ずしも一般的なものではなかったであろう。多くの奉納は、下越地域の範囲内から集句するものであった。一般的な俳人にとっては、「連中」と呼ばれる結社が日常的な俳諧の場所であり、それをこえた広域的な活動の場として、下越一帯に及ぶ交流圏が広がっていたと考えられる。もちろんそれは、伊勢派、美濃派などといった全国的な俳諧ネットワークとも強い関係を保っていた。奉納の撰者をこれらの宗匠に依頼する場合もあった。日常的・広域的・全国的なそれぞれのレベルで交流圏を持つており、各俳人は、自身の力量に応じた参加の仕方をしたのである。

3 俳人と俳句

「俳諧留」に登場してくる俳人たちは、一体どのような人たちだった

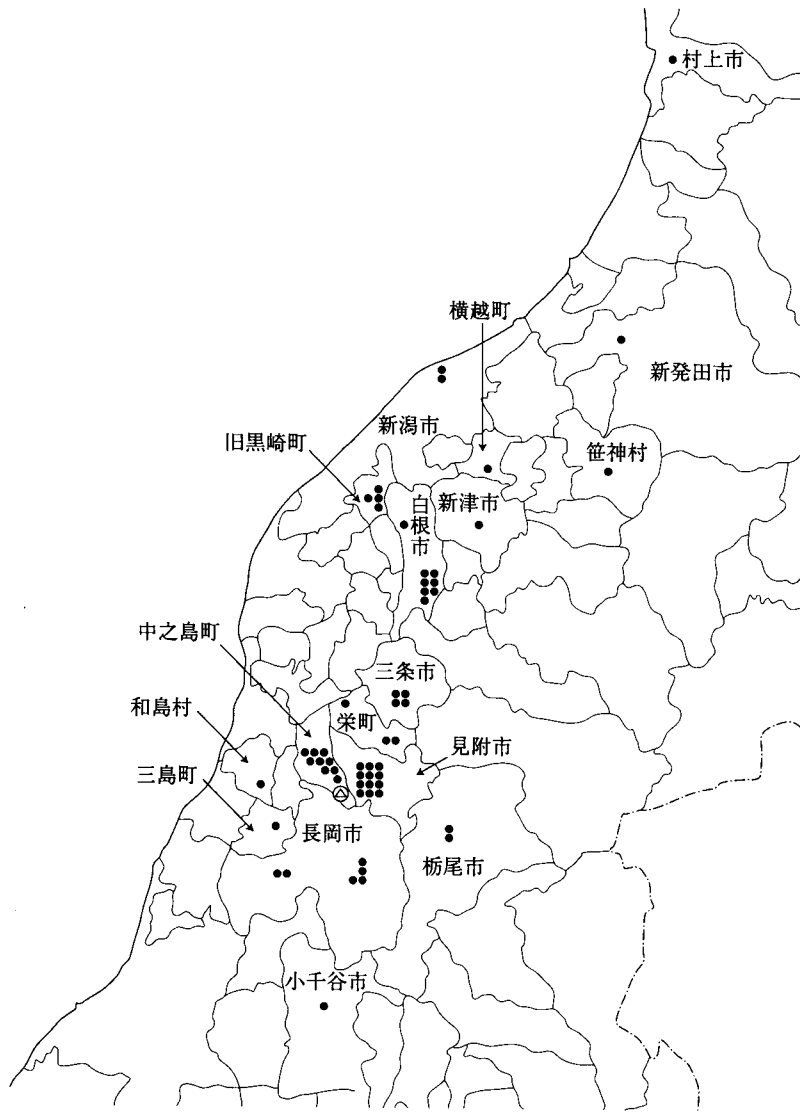


図5 元文2年中之嶋町諏訪宮奉納
 ○△奉納先 ●入撰者

のだろうか。町村名と併号のみの記載からは、これらの俳人たちの本名や身分・階層などを知ることはできない。しかし、各自治体史などこれまでの研究によって判明している人物も何人かみられる。ここでは、これらの人々を中心としてみてみることにしよう。

まず各奉納の撰者となっている人を見てみよう。新潟の一字は、元文四年国上山如来殿奉納の撰者をつとめている。僧職であり、享保十二年以前に弥彦山の隣にある多宝山麓に隠棲したといわれる。美濃の各務支考を訪ね、諸国を行脚して、享保十二（一七二七）年に句集「芋かしら」

を発行している。³⁴「芋かしら」は越後の俳人が発行したもっとも早い時期の俳書のひとつである。一字はほかに年不詳の国上山如来殿奉納の評者もしているが、国上山は一字のいる弥彦山地の南端に位置している。

同じく新潟の慈竹は、正徳六（一七一六）年の新潟白山宮奉納、享保三年の新潟如来寺大仏堂奉納、享保初めの頃の寺社村観音堂奉納、年不詳新潟町天野神明宮奉納などの撰者となっている。信州善光寺門前の武家に生まれ、新潟で医師をしていたといわれる。享保二一（一七三六）年の没である。没後、池柳によって追善集「春の雨」が編まれていたが、その序を伊勢の乙由が書いており、伊勢派の流れに属していたらしい。³⁵

池柳は、元文期に頻繁に奉納の撰者をしており、この時期の新潟におけるもっとも有力な俳人のひとりであったと思われる。このほか、年不詳笠巻奉納の撰者となっている東伯も、諸国の俳書にその名前を現す俳人であった。³⁶このように、各奉納の撰者となっている人物は、いずれも越後内外において名前の知られた存在であった。

次に一般の俳人についてみてみよう。まず新潟の鷺洲は、享保十一年と翌十二年の歳旦にその名前が見えている。前者の歳旦では

花の香に奈良商人の声つれて

という句を詠んでいる。回船問屋を営む商人であり、町老をつとめた。寛延三（一七五〇）年に剃髪して僧体となり、下越を中心に俳諧行脚したといわれる。俳書「頭陀行」を編んでいる。³⁷

同じく新潟町の葉圃も、享保十一年の歳旦で次のように詠んでいる。

若水や神の威を汲信濃川

鷺洲同様、回船問屋を営んでおり、やはり町老を務めた。鷺洲、葉圃はこの時代の新潟町の俳諧の中心的存在であったといわれる³⁸⁾。

水原の美笑は、同町の旧族、我孫子氏であったといわれる。『水原郷土史』によれば、我孫子氏は、その出自不明ながら、安永年間に莫大な費用を投じて五頭山海満寺に三十三番の観世音を寄附した富者であった。俳号として素月、美笑などの名前のみが伝わっているが、その句は存するものがないとしている³⁹⁾。しかしその美笑の句も、「俳諧留」に記されている。そのいくつかを紹介してみよう。

裏付の袴ぬく日の牡丹哉

元文三年中嶋村薬師堂奉納

種時の袋から出る雲雀哉

元文四年保田町地藏堂奉納

虫干や竿に重たき日の句ヒ

元文五年外城村八幡宮奉納

このほか、年不詳「水原寄」、元文三年中嶋村薬師堂奉納、寛保元年木津村薬師堂奉納などにも出句している。

入集している者のなかには、詳細不明ながら、盲人、女、遊女、少年なども含まれている。盲人は二人の名前が見えるが、その一人である新潟の岡一は次のように詠んでいる。

東雲や礼とおし合初鳥

享保十一年歳旦

女性は十五人ほど確認できるが、このうち三人は遊女という肩書きを持つ。遊女の錦木の句は次のようなものである。

裏道は月夜も聞き水鶴哉

年不詳新潟如来寺奉納

少人と記される者が二人、少年女と記される者が一人見える。在所不明の少人大吉と、新潟の少人竹風の句を紹介しておこう。

小学の道に際なし初手水

大吉 享保十一年歳旦

海山の景色を飾る雑煮哉

竹風 享保十一年歳旦

「俳諧留」に掲載されている俳句は、千を超える出句のなかから選ばれたものである。したがってそれは、実際に存在した俳人のほんの一部をあらわしているにすぎない。この時期の俳諧の中心は、先にみた富商

や富豪、村役人などが担っていたと思われるが、その周辺に、しだいに俳諧人口を広げつつあった様子をうかがうことができる。

4 投句の機会

「俳諧留」には、同一の俳人が何度も登場する。俳額奉納があるたびに投句している俳人もある。これらの投句動向から、当時の俳人たちの日常的な俳諧活動の一端を知ることができる。

水原（水原町）の一帆の場合をみてみよう。一帆はまず寺社村観音堂奉納（元文二年）にその名前が見え、翌元文三年には下條村天満宮、小杉村八幡、岩船宮の各奉納に次々と句を納めている。元文四年には歳旦に句を載せ、菅谷不動堂に奉納している。元文五年にも歳旦と外城村八幡宮に句を見せている。翌寛保元年の歳旦にも句を載せ、そのほか年不詳の六ノ原弁天堂にも奉納、春水原寄、名月の吟などにも俳号が見える。以上のように、元文二年から寛保元年頃にかけて、十二回の奉納、歳旦等に、合計十三句を載せているのである。

横越（横越町）の一笙も活発に投句している俳人の一人である。元文元年木津村薬師をはじめ、元文三年には小杉村八幡、中嶋村薬師、岩船宮に奉納し、元文四年にも歳旦、保田地蔵堂奉納、元文五年には歳旦に句を載せ、翌寛保元年には再び木津村薬師に奉納している。このほか年不詳の奉納、歳旦など四件あり、合計十二回にわたり、十三句を載せている。

新潟のソホクは八回にわたり十一句を、荻島（新津市）の寸家の場合は八回にわたり九句を載せている。「俳諧留」の作者とみられる須走村（笹神村）の兎睡が四度の俳額奉納に八句を載せていることは前述したとおりである。

このように、当時の俳人たちの俳諧活動はきわめて活発であった。投句しても必ず入集するとは限らないから、実際に投句する頻度はさらに

高かったであろう。また、「俳諧留」に記される俳句も、これらの俳人の俳諧のすべてではない。「俳諧留」には記されない種々の句会や奉納、句集の編纂などにも参加していたはずである。

以上から、十八世紀前半における越後の俳諧が、社寺への奉納などの機会を中心として、きわめて日常的におこなわれるようになっていたことが知られるのである。

まとめ

本稿では、佐久間家の「俳諧留」によって、越後における俳諧の地域的展開についてみてきた。越佐の俳諧は、芭蕉通行以後ようやく興隆をみせ、幕末期には集落ごとに結社をもつまでに大衆化する。しかしその中間期である十八世紀前半は、俳額などもほとんど残存せず、地域的な実態は未解明の部分が多かった。「俳諧留」は、俳諧の諸活動がこの時期にもきわめて活発におこなわれていたことを記録しており、地域的な浸透過程の一端を明らかにしてくれる。社寺への俳額の奉納はきわめて頻繁におこなわれており、一年の間に何度も投句の機会があったことがわかる。

これらの機会を通じて、他町村の俳人との交流が活発におこなわれていた。それは、地元の俳諧結社を中心としながらも、下越全体に広がる規模のネットワークを形成していた。また宗匠クラスの俳人を通じて、全国的な俳諧ネットワークともつながっていたのである。

冒頭に述べたように、杉仁は、十九世紀の在村における俳諧が商品流通と深い関係をもっていたことを明らかにした。十八世紀前半の越後における俳諧ネットワークが、商品流通などどのような関係をもっていたのかは、本稿においては十分に明らかにし得なかった。越佐の初期の俳諧が海岸線の地域からはじまることから明らかのように、やはり流通

や交通と深い関連をもっていたことは明らかである。しかし奉納された俳額をみれば、多くの俳人が幾重にも重なるように、種々のネットワークに参画しあっていた様子を知ることができる。むしろ、俳諧のための独自の文化圏がそこに存在したのではないだろうか。伊勢派、美濃派などといった特定の俳壇の影響が及んでいることにも、それはうかがわれる。中上流の階層が担っていたと思われる十八世紀の俳諧においては、このような文化的なネットワークとしての独自性は、より強いものであったと思われる。

杉が言う商品流通と一体化した風雅の世界は、十八世紀前半において形成されていたこのような文化的なネットワークを前提としながら、活性化しつつあった商品生産とその流通の世界と結びつくことによって生み出されていったのであろう。幕末期における俳諧大衆化の基礎的な条件が、十八世紀においてすでに成立していたことを確認することができるのである。

註

- (1) 久木幸男「古代民衆識字層の存在形態」(『日本古代学校の研究』玉川大学出版部 一九九〇年)。
- (2) 網野善彦「日本の文字社会の特質をめぐって」(『列島の文化史 五』日本エディタースクール出版部 一九八八年) 四三頁。
- (3) 八嶽友広「十九世紀末日本における識字率調査―滋賀、岡山、鹿児島県の調査を中心として―」(『新潟大学教育学部紀要』三二巻一号 一九九〇年十月、同「近世民衆の識字をめぐる諸問題」(日本教育史研究会「日本教育史研究」十二号 一九九三年十月)。
- (4) 青木美智男「文化文政期の民衆と文化」(文化書房博文社 一九八五年)、同『「茶の時代」(校倉書房 一九八八年) など。
- (5) 杉仁「近世の地域と在村文化―技術と商品と風雅の交流―」(吉川弘文館 二〇〇一年)。
- (6) 小林計一郎「俳諧の隆盛と社会」(竹内誠編『日本の近世 十四』中央公論社 一九九三年) 一三〇頁。

- (7) 『新潟県史 通史編三 近世二』(新潟県 一九八七年)第五章「近世文化の形成」、第一節「教学と庶民文化」。
- (8) 同前、七六八頁、表一七四「諸国員門・談林俳書にみえる越佐俳人」より。
- (9) 同前、七六九頁。
- (10) 越佐古俳書研究会編『近世越佐の俳書 第一巻』(高志書院 一九九八年)。
- (11) 同前。
- (12) 同前。ただし同書では、『新潟県史 資料編十一』に掲載されているものは採っていない。
- (13) 『新潟県史 通史編四 近世二』(新潟県 一九八八年)八一三―八一八頁。
- (14) 同前、八一六頁。
- (15) 同前、八一七頁、「表一三九 『暁の空』 出句の俳人居住地」より。
- (16) 同前、八一八頁。
- (17) 『新津市史 通史編・上巻』(新津市史編さん委員会編 一九九三年)七六九頁。
- (18) 『十日町市史 通史編三 近世二』(十日町市史編さん委員会編 一九九六年)四三二頁。
- (19) 『長岡市史 通史編上巻』(長岡市 一九九六年)六五三頁。
- (20) 『新潟市史 通史編二 近世(下)』(新潟市 一九九七年)四八四頁。
- (21) 『堀之内町史 通史編 上巻(堀之内町 一九九七年)四〇六頁。
- (22) 『吉川町史 第一巻』(吉川町史編さん委員会編 一九九六年)八六三頁。
- (23) 前掲『十日町市史 通史編三 近世二』三九八頁。
- (24) 前掲『堀之内町史 通史編 上巻』四〇六頁、および前掲『十日町市史 通史編三』三九九頁。
- (25) 前掲『十日町市史 通史編三』四〇〇頁。
- (26) 『三島町史 上巻』(三島町史編纂委員会編 一九八四年)三七〇頁。
- (27) 前掲『新潟市史 通史編二』四八六―四九三頁。
- (28) 前掲『新津市史 通史編・上巻』七六〇頁。
- (29) 『見附市史 上巻(二)』(見附市史編纂委員会編 一九八一年)三九七頁。
- (30) 『村松町史 上巻』(村松町史編纂委員会編 一九八三年)九八二―九八六頁。
- (31) 前掲『十日町市史 通史編三』四三六頁。
- (32) 佐久間政栄家文書(新潟県笹神村)。
- (33) 加藤定彦『俳諧の近世史』(岩草書房 一九九八年)三二二頁。
- (34) 前掲『新潟市史 通史編二』四八七頁。
- (35) 同前、四八八頁。
- (36) 同前、四八七頁。
- (37) 同前、四八八頁。
- (38) 同前、四八八―四九〇頁。
- (39) 『水原郷土史』(小林存 一九七六年)一九二頁、二六一―二六二頁。
- (新潟大学教育人間科学部、国立歴史民俗博物館共同研究員)
(二〇〇一年六月五日受理、二〇〇一年九月四日審査終了)

The Regional Spread of Literary Culture in Early Modern Japan: Connecting with the Culture of Haikai in Eighteenth Century in Echigo Province

YAKUWA Tomohiro

This paper attempts to throw light on one aspect of the regional spread of literary culture in eighteenth century Japan by examining the culture of haikai (Japanese traditional style of poetry) in Echigo Province, Niigata Prefecture.

“Haikaidome”, the Haikai Anthology of the Sakuma family in the Kanbara district of Echigo Province provides us with records of a large number of haigaku (haikai votive tablets) presented to shrines and temples and collections of New Year haikai from the beginning of the Shotoku Period in 1711 to the end of the Kanpo Period in 1744. This precious document tells us much about regional development of haikai culture in the first half of the eighteenth century, a field that has not been sufficiently elucidated even in historical research on haikai.

An analysis of “Haikaidome” shows that dedication of haikai to shrines and temples was a widely practiced custom. Some of these dedications consist of more than 2,000 haiku verses, clearly showing that haikai culture had already put down deep roots.

The haiku poets of Echigo Province and Sado Island are listed in the “Index of Haikai Poets in Sado, Echigo Province” (Early Modern Haikai of Sado, Echigo Province, Volume 1, 1998), which includes the haiku poets recorded in the verse anthologies of each area, yet there are many poets mentioned in the Haikai Anthology who are not listed in the Index. From this we can confirm the existence of a considerable number of poets whose names do not appear in verse anthologies. These include poets who used the names “blind person”, “lady of the night”, and “man of low rank”. As many as fifteen of them can be identified as women.

A regional analysis of the poets whose verses are included in the Haikai Anthology shows that the haikai dedication network was essentially a structure consisting of three concentric stages, with verses by poets from the area in the vicinity of the shrine or temple at the center, surrounded by verses coming from the Kaetsu region, and then by verses from all over Japan.

The dedication of haikai votive tablets to shrines and temples was mainly done by poets from the surrounding area, but poets from other areas also had their poems selected for inclusion in anthologies. Of course, since not all the poems submitted would be selected, poets took advantage of the opportunities provided by dedications to various shrines and

temples to submit poems. This haikai dedication thus played a very important role as a medium for the spread of haikai.